

一人称の罣

作家 恩田 陸

小説を書く時、一人称で書くか、三人称で書くかというのは結構大きな問題である。

私は一人称がとても苦手なので、だいたい三人称か、一人称で書く時は章ごとに語り手の人物が変わる構成の一人称を採用することが多い。

そもそも、一人称の小説が苦手だと気づいたのは専業作家になってからのことで、それも編集者やインタビュアーに度々質問されるうちに、なぜだろうと自分でも考えるようになったのである。その結果、複数の理由があるが、いちばん大きな理由は、子供のころに読んだ本がみな三人称だったから、という単純なものだった。初めての絵本も、児童文学も、かつてお話の

ほとんどは三人称だった。文字通り、絵本や児童文学で、世界を俯瞰し、自分を外側から見ることを覚えていったように思う。

それに、私の印象では、かれこれ三十年も前は、一人称を使うのは、一人称を使うこと自体にお話の仕掛けがあるか、かなり突っ張った、既成の大人社会への抵抗を示す場合のみだった。だからこそ、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』や庄司薫が若者に熱狂的に受け入れられたのであり、今現在、村上春樹が世界で「青年の文学」として人気を博しているのだと思う。

そのいっぽうで、私は小説を書き始めたころから、一人称というものが言わば「禁じ手」の

ように感じられていた。たいした技術も経験もないのに三人称で書くという、言わば大海に放り出されたような心もとなさを感じていた時、

「そうか、一人称という手があるな」と思ったことはしばしばあり、実際、書いてみると書き易く、ハードルが低く感じられた（それは罣なのであるが）のだが、「いや、最初からこれをやってしまったてはいけない」という直感が身体どこにかあつて、結局避けたことをよく覚えていて。もつとも、私の書くような話にはミステリー的要素が多いので、仕掛け上、一人称には向かなかったという理由もある。

考えてみると、日本の近代以降の「私小説」というジャンルですら、一人称を使っているものは

まれである。太宰治ですら、「読者に語りかける作家」という印象から一人称をいっばい使っていそうだが、そうでもない。どちらかといえ

ば彼は二人称の作家という珍しいタイプかもしれない。

最近つくづく思うのだが、一人称という形式には、いっばい罣が仕掛けられている。

特に純文学であればどうしても作者と同一視されてしまうし、実際「これは私ではない」と意識しつつも「私」の物語を「私」の視点だけで綴っていくというのは、二重の檻に入れられているようなもので、そのところに私は強い抵抗を感じてしまう。よほど強い自己客観性を持っていない限り、管理と制御が難しい形式なのだ。

逆に、「謙作は」と名前を付け、登場人物として突き放してしまえば、かえってそこに私事や私情をすんなりと入れやすい。近代の作家はそのところを理解していたのだろう。

また、読むほうにも一人称には「共感」という大きな罣がある。近年発達したいわゆるヤング・アダルト系の小説は、「僕」や「あたし」が親しみやすい口調で世界への違和感を語り、「ここに私のことを分かってくれている人がいる」という共感を抱くようにできているものが多いが、だからといって「共感」がほんとうに「理解」

とイコールなのか、共感できない人は「私のこと」を分かってくれていないのかという、根本的な問題に気付きにくくなっているのである。

しかし、ここ十年くらいで、一人称の性質は大きく変わった。知りあいの編集者に聞いたところ、純文学系の新人賞の応募作品は、ほぼ九十九パーセント一人称だという。それも、実作者と二人称の「私」はほぼ一致し、そのことに抵抗がないようなのだ。

世界が一人称になりつつあることは、日々感じている。特に、携帯電話が行き渡つて、一人称をパブリックの場所に持ち込むことすら日常になった。世界は「私」になり、「私」をそのまま世界に一致させることに抵抗がなくなったし、世界の中にいる「私」を俯瞰するよりも「私」という檻の中から世界を見、「私が傷つき」「私が癒され」ることが最優先になったのである。しきりに「私って」と呟く彼らは、そのまま一人称の罣にどっぷり浸かっている。「私」を表現するには、冷徹な自己観察力を必要とすること、「私」の視点でいる限り、いつまでも自分を発見できないこと。「本当の私」をつかむには、何より三人称の視点を獲得する以外ないという、逆説めいた事実を受け入れるしかないのだということを。



恩田 陸（おんだ りく）

1964年、宮城県生まれ。

2005年『夜のピクニック』で吉川英治文学新人賞および本屋大賞、06年『ユージニア』で日本推理作家協会賞、07年『中庭の出来事』で山本周五郎賞を受賞。ホラー、SF、ミステリーなど、さまざまなジャンルの小説で独自の作品世界を築いている。